さるに至りしは遺憾の極なりし

○大学予科学期試験　来る十八日より同試験を挙行して精細に成績を点検し其優劣を定め夫夫学則に依り処置する筈なり

○講師増聘　故落合講師遠逝せられてより大学予科の国語を欠き居りたるか多年同講師の薫陶を受けたる文学士尾上八郎氏其任を襲はれ先月より出講せらる又英語に付ては平井金三氏（東京外国語学校教授）は久しく病痾を養はれ居りしか全癒せられたるを以て来月より出講せられ又新に「マストルオブアーツ」高島捨太（東京高等商業学校教授）学習院学士高橋皙の両氏は英語を文学士高津鍬三郎氏は国語を文学博士原勝郎氏は歴史の臨時講義を鹿野清次郎氏（東京高等商業学校教授）は簿記学を担任せらる

○独逸語予科の新設　従来大学予科の外国語は英語に依るものなりしか新に独逸語に依るものを新設し文学士葉山萬次郎（東京帝国大学講師）文学士齋藤信策の二氏を始め数名の講師授業の任に当られ来る四月より開始の筈なり

○東京法学院大学学生懇親会　日露の平和断絶して国家の事全く軍人の手に移されたる今日在学生徒中身を軍籍に置く者は何時召集の命に接するやも測り難しとて東京法学院大学にては奥田理事坂本幹事及ひ学生諸氏発起人となり先輩有志の賛同を得て去る二月九日此等諸士の為めに送別の意を表すへき懇親会を同大学内に催したり此日参集したるは在学軍人三十余名を始めとして講師院友及ひ学生無慮六百有余名にして午後一時過より先つ軍談薩摩琵琶等数番の余興あり或は忠勇義烈快哉を叫は

190　東京法学院大学記事（講談会・大学予科学期試験・講師増聘・独逸語予科の新設・東京法学院大学学生懇親会）

〔『法学新報』第十四巻三（一五七）号　明治三十七年三月十日〕

東京法学院大学記事

○講談会　去る二月二十七日午後一時より校内第三講堂に於て開会し第一席高橋法学博士は日露開戦の始期に付て第二席酒生文学士は年代記憶術を第三席に去冬欧米の観光を終へて帰朝せられたる鉱山局長田中法学士は特別法研究の必要なる問題の下に欧米現時社会の状態に付て剴切なる注意を学生に与へられ終りに穂積陳重博士立て電話と法律と題し斬新なる学理応用の問題を懇切に解明せらる当日は降雨霙に変し余寒凛涼なりしに拘はらす聴衆は午後三時既に堂に満ちて入場を謝絶せさるを得

しめ或は悲壮激越涕涙の滂沱たるを禁せさらしむ次て学生玉井氏発起人を代表して登壇簡明に開会の弁を述へ次て土方、金井の両博士は懇懇軍人の覚悟を諭して嘱望の一班を述へ其他学生に向ては自愛慎重苟も軽挙妄動あるへからさることを注意し花井、新井の両院友は例の快弁を振つて勇壮活発なる演説を試みたり中にも花井氏か維新以後露の我帝国に対する侮辱的行動を摘示したる一節の如きは実に慷慨を極め懦夫も尚ほ且つ奮起せさるを得さりし其他院友学生諸氏の演説あり了りて軍人総代廣澤中尉の叮重なる答辞及ひ数氏の演説あり或は露の国力を粉齏し彼か全力を傾けたる西此利亜鉄道をして第二の万里の長城たらしめすんは止ますと誓ひ或は遼東還付の失敗史を繰返すなきは実に諸君の任にあり戦捷後地下に眠れる吾吾をして再ひ夫の臥薪嘗胆の歓声を耳にせしむる勿れと絶叫するものあり既にして満堂起て万歳を三唱し散会したるは午後六時なりし